

---

# 流星のロックマン 過去からの遺産

めっとーる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流星のロックマン 過去からの遺産

### 【Nコード】

N1264I

### 【作者名】

めつとーる

### 【あらすじ】

三度の危機から地球を救った少年、星河スバル。相棒のウォーロック、父星河大吾も無事に帰ってきて仲間と共に平和な時間を過ごしていた。

そんなスバルとある少年との出会いを期にまたしても戦いの日々が始まるうとしていた。新たな戦いに戸惑うことさえ許されず、スバルの前に最凶の敵が立ちはだかる。

## ブローグ 未来への遺産（前書き）

これは流星のロックマンとロックマンエグゼのクロスですので両方の知識がないと分かりにくいかもしれません。ご注意ください

## プロローグ 未来への遺産

### プロローグ

「よし、これでプログラムは完成だ」

プログラミングを終え、大きく背伸びをする青年

彼の名は光熱斗、少年時代にナビであるロックマン e x e と共に何度も世界の平和を守った男である

「ふ、ようやくか。随分待たされたぞ光」

そんな彼に後ろから声をかけるのは伊集院炎山

彼もまた少年時代に熱斗や頼もしい仲間と共に何度も世界を救ってきた男であり、熱斗の最強のライバルであり最高の友でもある

だが、そんなかれらも時が経つとともに大人になり少年時代の彼らの活躍を知るものも少なくなってきた

「無茶言つなよ炎山、これがどれだけすごいプログラムかはお前が一番分かっているだろ？」

本来、これだけの規模のプログラムを作るには一流の科学者が何人

も共同で作業に当たる場合が殆どだ

しかしこのプログラムはあまりの危険性ゆえに、悪用されることを恐れ熱斗がたった一人で完成させた

炎山もこのプログラムの危険性は十分に理解しているのでこれ以上熱斗を攻める気はなかった

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

二人が深刻な顔をして完成したプログラムを眺める

「作っておいてなんだが・・・・・・・・こいつが世に出ないことを願うぜ」

「まったく・・・・・・・・しかし」

「ああ。俺たちが出来なかった仕事を子供たちに丸投げじゃ、大人として格好つかないからな」

「その通りだ」

そういつて二人とも硬い握手を交わす。これが今生の別れになると分かっているからだ

「炎山・・・・・・・・俺がこんなこという資格ないのかもしれないけど・・・・・・・・世界を頼む」

「まかせろ」

それが二人の交わす最後の言葉になった

互いに伝えることはすべて伝えた。あとは言葉ではなく行動で示すことだ

数日後、伊集院炎山の死亡が発表され同時に史上最大のネットテロ事件が発生した

そしてその二つの事件の首謀者は光熱斗と発表された

## ブローグ 未来への遺産（後書き）

なんとなく勢いで書いてしまいました（汗  
よろしければ感想などいただければ幸いです

## 第一話 出会い

### 第一話 出会い

「おい！スバル、いい加減おきろよ！」

もはや自分の日課であると言い切れる朝の行事

相棒である星河スバルを大声で起床をうながすウォーロック

「むう……あと五分……」

などとありきたりな返しをしてくるスバル

「それはさっきも聞いたぜ！あれから五分経ったんだ。いい加減に  
しやがれ！」

「分かったよ……」

ウォーロックが本気で起こり始めているのを感じ取って渋々布団か  
ら出てくるスバル

「まったく、お前はよお……」

いまだにぶつぶつと文句を言ってくるウォーロックを無視してさっ

さと服を着替えリビングへと向かう

「しょうがないだろ。朝は苦手なんだから……」

時間が時間だったのでいそいで朝食を食べているとあっという間に委員長たちが迎えにくる時間となった

玄関にでると案の定不機嫌そうな委員長とその委員長をなだめているキザマロとゴン太の姿があった

「遅い！スバル君、一体いつになったらあなたは私を待たせないようにしてくれるのかしら！！」

一瞬だけそっちが勝手に迎えに来ているのではと思うってしまうが、寝坊している自分が悪いので黙ってしまうスバル

「ごめんね、多分無理。それよりおはよう、委員長、キザマロ、ゴン太」

「おはようございます、スバル君」

「オッス！スバル」

「……ふん、おはよう。ほらさっさと学校に行くわよ。生徒会長が遅刻なんて冗談にもならないわ」

これ以上は言っても無駄と判断したのか委員長はさっさと学校へと向かってしまう。それをみて慌ててついていく男の子三人

「大体スバル君はね……」

学校にはむかいつつスバルについて延々と愚痴を言いまくる委員長。  
ここ最近の登校ではずっとこの調子である

スバルはそれにあわせて苦笑しながら曖昧に頷くだけである

「まったく、そんなんでよく・・・せ」「世界を救ったヒーローか。  
こんな奴に頼らなければ世界を守れないとわな、この時代の人間は  
よほど腑抜けているらしい」

「」「」「!?!」「」「」

突然、四人の会話に割り込んでくる少年が出てきた。少年はスバル  
たちの前に立ちふさがるように立ち真っ直ぐにスバルを見つめていた

## 第二話 呼び出し

（おい！スバル、目の前の奴とんでもなくヤバいぞ！）

（うん、分かってる。ブライと互角かそれ以上だ）

さすがに三度も世界を救ってきただけありスバルもウォーロックも目の前の少年が底の知れない力を秘めていることにすぐにきづく

緑のスポンをはき赤色のジャケットをきた白と黒が綺麗に分かれた頭をしているこの少年は一体何者なのであろうか？

「なによ、あなた！いきなり現れて失礼じゃない！」

相手の鋭い眼光におびえながらも委員長が必死で少年をにらみ返す

「……お前に用はない」

ほんの少しの間だけ視線をスバルから委員長へと移すがもともと彼女に興味がないのかすぐにスバルに視線を戻す

「ちよつと、あなた！」

なおも何か言おうとしている委員長を無視して少年はスバルの真正面に立ち、真っ直ぐに彼を睨みつけた

「く……」

あまりの威圧感に思わず目をそらしたくなるスバルだが、なぜか絶

対に目をそらしてはならないという直感がして必死で睨み返す

ずっとこのにらみ合いが続くかと思われたが意外にも少年の方が睨みつけるのを止め僅かに笑顔をみせる

「ふっ・・・顔も性格もあいつとは似ても似つかないが、目に宿る光だけは同じだな」

「??」

少年の言っていることが理解できず混乱するスバル

少年は用事は終わったとばかりにスバル達に背を向けこの場を立ち去ろうとする

「星河スバル・・・いや、ロックマン。放課後、展望台でまっている、お前一人で来い。来る来ないは貴様の自由だがな」

「あ、君待つて・・・!!」

まだ聞きたいことがあるとスバルが引きとめようとするが、そのとき突風が吹いて思わず目をつぶってしまう

そしてまた目を開けた瞬間にはもう少年のすがたはどこにも見えなくなっていた

「一体、彼は何者なんだろう・・・」

「は！誰だって構わねえよ。久しぶりに骨のある相手と戦えそうじゃねえか。ウデがなるぜ！」

ウォーロックが勝手に出てきて爪を振り下ろす。もともと喧嘩好きな彼にしたら強敵の登場は好都合なだけなのかもしれない

「ちょっと、スバル君！まさかとは思うけど、あなた本当に展望台に行くつもり！？」

「え？うん」

当たり前のように頷くスバル。何故だか分からないがこのときのスバルにあの少年の呼び出しを断るという選択肢はなかった

そのスバルの反応に委員長が何かを言おうとする前にウォーロックが大声で吠える

「よっしゃ！よく言ったぜスバル。あのすかしたツラぶっ飛ばしてやろうぜ！」

スバルの台詞に気をよくしてますます派手に爪を振り回すウォーロック

「いや、別に戦うって決まったわけじゃ……」

しかしこれ以上の議論は学校から聞こえてきた始業のベルによって中断される

「……あつ！？」「」「」

そしてようやく今が登校時間であり、先程のやり取りでとくに登校時間が過ぎていることを理解する4人

急いで学校へと向かうが時既に遅く委員長以下三名は遅刻となった

## 第二話 呼び出し（後書き）

ちょっと短いですけどupしました。

多分、この少年が誰かは皆さん気づいていると思いますけどもう少し謎の少年でいかせて貰いますね

## 第三話 異変

### 第三話 異変

放課後、約束の時間となりなその少年が待っているであろう展望台へ向かうために教室を出ようとするスバル

去り際ちらりと委員長の方をしてみるが、彼女はこちらを見ようとせず不機嫌そうなおーラを周囲に発散していた

（ごめん、委員長）

散々自分の身を案じて行くな行くなと連呼していた彼女の姿を思い出し、申し訳ない気持ちでいっぱいになる

そして

（キザマロ、ゴン太・・・本つつつ当にごめん！！）

自分が意見を曲げないために不機嫌にしまった委員長に付き合いわされて困り果てている二人を見て心の底から謝罪するスバル

埋め合わせは必ずしようと心に固く誓って目的の場へと向かうスバル

「来たか。待っていたぞ、ロックマン」

約束の場所へ到着すると謎の少年は既に来ており、以前スバルがここに来て星空を眺めていた場所に立っていた

「一体、僕になんの用があるんです？そもそも、あなたは何者なんですか？」

真っ直ぐに自分を射抜いてくる視線にも動揺せずにスバルが口を開く

「俺か？さあ、一体何者なんだろうな……」

肩をすくめて冷やかな冷笑を浮かべる少年にスバルが警戒を強める

「そう警戒するな。いつか、戦うことになると思うが……今はまだ、その時ではない。今日は挨拶をしに來ただけだ」

そっぴい終えると少年はまたしてもスバルに背を向けこの場をそろっとする

「てめえ！待ちやがれ！」

ウォーロックが出てきて彼を止めようとするが効果がなく、スバルが追いかけてきたとき街のほうから大きな悲鳴が聞こえてくる  
その悲鳴につられるように少年も足を止めて悲鳴がしたほうを向く

「！？おい、こいつはてめえの仕業か！」

今にも飛び掛りそうになるウォーロック

「いや、関係がないといえば嘘になるが俺が原因ではない。それよりこんなところで油を売っていいのか？」

その言葉にハツとなるスバル。ここでこうしている間にも街の人が危険に晒されているかもしれないのだ

「ロック！この人の事は気になるけど、今は・・・」

「ちっ！しょうがねえ、街の方が先だな！」

最後に少年を睨みつけて街の方へ駆け出していくスバルとウォーロック

「トランスコード！シューティングスターロックマン！」

この星を三度救った英雄へと電波変換し勇ましく駆けて行くロックマン

その背中をどこか懐かしそうに眺める少年。その顔には笑顔さえ浮かんでいる

「光・・・喜べ、俺たちの遺志は時代を超えても受け継がれているぞ」

もはや会うことの叶わない友の顔を思い浮かべながらそうつぶやきながら振り返る

その先には先程まで影も形もなかったはずなのに大量のウィルスが

発生していた

「さて、こいつらを街に行かせるわけにはいかな」

その顔に力強い笑顔を浮かべながら少年が叫ぶ

「電波変換！ブルース！トランスミッション！！」

次の瞬間に立っていたのは赤を基調とした戦士だった

## 第四話 破壊神降臨

### 第四話 破壊神降臨

ロックマンへと変身したスバルが向かった先では数体のウィザードが暴走していた。それにあわせて周囲の人も避難したようで周りに人は誰もいなかった

「ガガガガ………」

「ちっ！完全に暴走してやがるな。おい、スバルさつさと片付けようぜ」

もはや会話も成り立たない状況なので力づくでとめるしかないと判断したウォーロックが戦闘態勢をとる

「仕方ない………」

下手に暴れられて街の人たちに迷惑をかけるわけにも行かないのでスバルも戦闘態勢をとる

「待ってくれ！ロックマン」

しかしいざ戦闘が始まろうとする直前に後ろから声をかけられる

振り返るとそこにはゴン太と彼のウィザードであるオックスが駆けつけていた。よく見るとさらに後ろでは委員長とキザマロもいる

ちょうど三人で帰宅しようとしていたところなのだろう

「ロックマン、こいつは俺にやらせてくれよ。特訓の成果をみてもらいてんだ」

そういつて自信満々そうに胸をたくゴン太。それにあわせるようにオックスも力強く頷く

「……分かったよ、くれぐれも用心してね」

「しょうがねえな……今回だけだぞ」

スバルが下がったのをみてゴン太が一步前へと出る

「へへ……サンキュ、スバル。いくぜ、トランスコード！オックス・ファイヤー！」

炎の雄牛、オックス・ファイヤへと電波変換したゴン太が勢いよく暴走したウィザードへと突撃していく

そして勝負はあっというまについてしまった

「すごい……ゴン太、本当に強くなってる」

「まあ、俺たちには程遠いがな。努力は認めるぜ」

予想以上にパワーアップしていたゴン太に素直に感心する二人

しかし、本当の戦いはこれからだった

『…………強者の波動を感じる…………』

「うつ！なんだこの悪寒は…………」

「くっ！ハンパねえぜ、こりゃ」

まるで心臓を直に握られたようなプレッシャーを感じ思わず膝をつくスバル。好戦的なウォーロックですら恐怖を感じている

「ロックマン様！」

「スバル君！」

スバルの様子がおかしいことに気づいた委員長とキザマロがこちらに駆けつけようとしてくるがそれを手で制すスバル

「二人とも危険だから下がっていて！」

過去の経験から自分たちでは足手まといにしかないことを理解している二人は渋々ながらもスバルの指示にしたがう

「おい、ロックマンどうしたんだ？」

どうやらこのプレッシャーを感じているのは自分たちだけのようだ

「ゴン太、気をつけて。なにかとんでもないものが来る」

「てめえらじゃ邪魔にしかならねえから下がってな」

必死に自分の心に喝をいれてなんとか立ち上がるスバル

前をみるとそこには大量のクリムゾンが発生しており周囲のノイズをどんどん吸収していき、やがてばらばらだったクリムゾンも巨大な一つの球となっていた

そして一つとなった巨大なクリムゾンの中から一体の電波体が出てきた

そいつは暗黒のオーラを纏い全身にぼろぼろのマントを羽織り氷よりも冷たい目でスバルを睨みつけてきた

「見つけたぞ………ロックマン………」

「こいつが……このプレッシャーの正体」

「おもしれえ、やってやろうじゃねえか」

いよいよ、現れた強敵を前に二人が闘志を漲らせる

「オレは……フォルテ。ゆくぞ、宿敵よ！」

フォルテと名乗った存在は迷うことなくスバルに襲い掛かってきた

## 第五話 敗北

### 第五話 敗北

フォルテと名乗るなぞの電波体に襲われるスバル

しかし、その圧倒的な力の前でなすすべもなく劣勢に立たされ、とうとう膝をつくスバル

「ハア・・・ハア・・・つ、強い・・・」

「なんて野郎だ・・・バケモノだぜ」

こちらの攻撃はその殆どが回避され、仮に当たったとしてもフォルテの纏っている暗黒のオーラに阻まれて本体にダメージを与えることが出来ない

逆に向こうの攻撃はあまりの早さによけることが出来ず、ガードをしてもそのガードを軽く吹き飛ばされてしまう

「弱い・・・弱すぎる・・・その程度でロックマンを名乗るなど笑わせる・・・」

無慈悲にスバルを見下ろす瞳はなんの躊躇いもなく死刑執行を決定する

「消えうせる!!」

フォルテが振り上げた腕に大量のエネルギーが集められ、それを一気にスバルに向けて振り下ろした

「くっ!!」

もはやよける力さえなくフォルテを睨みつけるのが精一杯の抵抗の手段でしかないスバル

ドカアアアン!!

強大な爆音がとどろき、あたり一面が砂煙に覆われる。そしてその爆心地に立っていたのは

「キサマ……」

「へへ……大丈夫か？スバル……」

「ゴン太!!」

スバルではなく電波変換したゴン太であった。フォルテの一撃を喰らってもはや立っているのもやつのようである

「てめえ……下がってろっていったらうが……」

「ハハ……なんだろうな、あいつを見てから足が震えて動かなかったくせに……スバルのピンチになったら勝手に体が動いたんだ……」

「ゴン太・・・」

「スバル、お前ならあいつに勝てるって信じてるぜ。なんてったってロックマンは俺たちのヒー・・・失せろ！」

ゴン太が最後までしゃべる間もなくフォルテのバスターによって吹き飛ばされる

「・・・・・・・・！？」

最後は声もなく気絶し電波変換が解けていつもの姿に戻るゴン太

「ゴン太！」

「ゴン太君！」

吹き飛ばされたゴン太に慌てて近づく委員長とキザマロ

「ザコが・・・なに！？」

ゴン太が気絶したのを見てスバルに視線を戻すフォルテ

そこには先程までとは比べ物にならない巨大なエネルギーを纏っているロックマンの姿があった

「フォルテ・・・お前は絶対に許さない・・・・・・・・」

纏っているエネルギーをすべてロックバスターに集中させ、フォルテへと狙いを付ける

「オモシロイ．．．やってみる!!」

フォルテもよけるつもりは無く正面から迎え撃つようで、暗黒のオリオンをエネルギーに変換し再び腕を高く掲げる

「ロックバスター!!!」

「アースブレイカー!!!」

ほぼ同時に二つのエネルギーが放たれぶつかり合い大爆発が起きる  
そして、立っていたのは．．．．

「ククク．．．残念だったな．．．」

フォルテだった。スバルは電波変換がとけ元の姿に戻って倒れている。ウォーロックもスバルの隣で気絶している

フォルテは先程の爆発でも傷一つ無くただ無慈悲にそこに君臨していた

「くそお．．．」

文字通りすべてを込めた一撃ですら通用せず悔しさでいっぱいになるスバル

「最後の一撃は良かったが．．．結局は無駄だったな．．．」

人間の姿にもどってもスバルはなおも戦おうと必死で立ち上がろう

とするがもはや自分の意思では指一本動かすことが出来なかった

（結局・・・全部、無駄だったのか・・・）

どうしようもない絶望に押しつぶされそうになるスバル

「無駄などではないさ」

絶望に負けそうになったスバルに喝をいれるかのような声がしてくる。見上げるとそこにはあの謎の少年が立っていた

「無駄などではない、星河スバル。お前たちが必死で戦ったおかげで、俺が間に合った」

「く！キサマは・・・」

少年は一睨み下だけでフォルテを後退させる。フォルテは明らかにこの乱入者を警戒していた

「あとは俺・・・伊集院炎山に任せておけ」

炎山と名乗った少年はそういつて電波変換し、赤い戦士となった。

「うつ・・・」

そしてその光景を最後にスバルの意識は途絶えた

## 第六話 夢

### 第六話 夢

（ここは・・・どこだろう）

スバルはあたり一面なにも無い場所に立っていた

ここには本当に何も無く、周りが暗いのか明るいのか自分が立っているのか浮いているのかも分からなかった

（僕・・・死んじゃったのかな・・・）

自分以外に何の存在も感じることが出来ずに思わず悲観的な気持ちになってしまふスバル

「いや、君は死んでないよ。ちゃんとまだ生きてる」

そんな何も無い空間に突然、どこからか声が聞こえてきた

「誰！だれかいるの？」

この空間で初めて自分以外の存在を感じて急いで辺りを見回すスバルだが、周囲を見回しても先程と変わらず誰も見つけることは出来ない

「ごめんね・・・ちょっと今は姿は見せられないんだ。でも、どうしても伝えとかなきゃならないことがあってね」

「伝えなきゃならないこと？」

「そう。この時代のロックマンである君に伝えなきゃならないこと。それは・・・」

そのとき、スバルのいた空間が突然歪みだした

「まずい、見つかったか・・・」

謎の声に急に焦りの色が見え始める

「時間が無い。スバル君、グレイブヤードだ。グレイブヤードに向かうんだ。・・・そこに・・・た・・・」

その声は段々と小さくなっていき聞こえなくなっていく

「まって！」

スバルが慌てて引きとめようとするがこの空間そのものがもはや限界らしく真っ白い光に包まれ何も見えなくなってしまう

「・・・ここは・・・」

次にスバルが目を覚ますとそこは病院のベッドの上だった

どうやらフォルテにやられた傷は想像以上にひどいらしく体のあち

こちらが酷く痛んだ

「ふん、ようやくお目覚めか」

声のするほうに首を向けるとそこには相棒のウォーロックがいた

「ポロロン……まったく、心配させるじゃない」

その上その隣にはウォーロックが苦手としているハープまでもいた

「え？ハープどうしてここに？」

本来ならミソラのウィザードである彼女がどうしてここにいるのだろ

「まったく……自分のベッドを良く見てみなさいな」

半ば呆れたようにそういうハープにつられて周りを見渡してみるスバル

そしてようやく彼女のいつていることが理解できた

「ミソラちゃん……」

自分のベットに体を預けて寝息を立てている彼女を見て胸が締め付けられる思いになる

彼女の横顔にははつきりと涙の後が見てとれたからだ。自分がふがないばかりにまたしても彼女を悲しませてしまった

「今は寝かしといてやりな。一晩中お前の看病をして疲れて眠っているところだ。お前ももう少し休んどけ」

「ミソラがおきたらたっぷりお説教してもらおうことね」

この二人もミソラを気遣って先程から小声で話していたのだろう

「うん、そうするよ。ボクももう少し休んでいたし」

そういつてまた目を閉じすぐに眠りにつくスバル

そして翌朝、スバルは起きた途端にミソラに抱きつかれて泣いているのか怒っているのか喜んでいいのか良く分からない顔で散々に文句を言われ、気がついたときにはなぜか二人でどこかに出かける約束をさせられていた

さらには同じくスバルを心配してきた委員長たちにこの光景を見られてしまい、またひと悶着が起ることとなった

## 第七話 明かされる真実 その1

### 第七話 明かされる真実 その1

ミソラがスバルに抱きついている光景を委員長たちに見られたこと  
によっておきた騒動も何とか収まり（委員長は不機嫌なままだが）  
ようやくスバルが気絶した後のことを聞くことが出来た

「じゃあ、あの後勝負は一瞬でついたの？」

「はい、その通りです。まさに電光石火でした」

キザマロから聞いた話はすぐには信じられない内容だった

なにしろあの炎山となのった少年はソロのように一人で電波変換し  
自分が気絶した後、たった一太刀でフォルテを切り裂いてしまった  
と言うのだ

「私も見ていたけど・・・本当に気づいたときには終わっていたわ」  
委員長やキザマロの言っていることが嘘ではないということを感じ  
取り、戦慄を感じるスバル

「で、でも良かったじゃないですか。あのバケモノはもういなくな  
ったんですから」

自分の話を聞いてスバルがどんどん落ち込んでいるのを感じて何とか励まそうとするキザマロ

「それがね〜どうやらそうでもないらしいのよ」

突然の声に全員が部屋の入り口へと視線を移す

そこには世界最高峰の科学者と言われているヨイリー博士が果物の沢山入った籠を持って立っていた

「ヨイリー博士、どうしてここに？」

「どうしてって、スバルちゃんが怪我をしたって聞いたからお見舞いに来たのよ。はいこれ、お見舞いの果物。ウォーロックちゃんも元気そうだなによりだわ」

「相変わらずマイペースなばあさんだぜ」

驚くスバルやみんなのことなどまったく気にせず自分のペースで会話を進める博士

「まあ、実はそれだけじゃないんだけどね。ちょっとこれを見てくれるかしら」

そいつって博士は懐から小型テレビを取り出しスバルに渡す

委員長達もテレビの映像を見ようとしてスバルに身を寄せてくる

「こ、これって！」

「あの野郎じゃねえか！」

スバルが画面をみるとそこには昨日自分達を襲ってきたフォルテについての情報とこれまでの目撃例などが細かに記されていた。そしてその中にはあの炎山となのった少年も写っているものである

一通り情報を見終えて顔を上げたスバル。それを待っていたようにヨイリー博士が口を開く

「この電波体・・・確か、フォルテと名乗ったのよね？」

その問いにスバルが黙って頷く

「実はね、このフォルテはここ数ヶ月だけでも三回は目撃されているのよ。スバルちゃん、この意味が分かるかしら？」

そういつて真っ直ぐスバルを見つめてくるヨイリー博士。当然、答えは分かっているのだらうとその目が訴えてくる

もちろんスバルにも博士が何を言いたいのかすぐに理解していた

「三回って・・・スバル君？」

ミソラも何か気づいたようでスバルの方を不安げに見つめてくる。スバルも彼女の視線に対して頷き返す

「うん・・・ロックマンが世界を救った回数だ」

さすがに自分がと言うのが恥ずかしかったのか、それともウォー口

ツクと一緒にと言う意味かは定かではないがロックマンという表現を使うスバル

そしてその答えは正解だったようでヨイリー博士も頷く

「そう。FM星人、ムー大陸、メテオG・・・地球になにか危機が迫るたびにこの電波体はすがたを現しているの」

「でも、そんな話私達一度も・・・」

委員長が何か言おうとするがそれは博士によってさえぎられる

「ええ、表沙汰にはなっていないわ。なにしろ世界中が混乱していた時期でしょ？」

「おい、それにしたっておかしいぜ。少し変な電波体ならともかくあのフォルテって奴はマジで化け物だ。そんな奴が三度も出てきたなら絶対に俺達も気づいているはずだ」

ウォーロックの反論は至極真つ当だ。スバルも彼につられるようにして頷く

「そうね、彼が大暴れしていたらそうなっていたでしょうね」

なにか遠まわしな言い方をする博士。しかしそこでスバルはある一つの可能性にたどり着く

「伊集院・・・炎山・・・」

またしても博士は正解と言わんばかりに頷く

「そう。このフォルテが現れるたびにこの少年、伊集院炎山が現れてすぐにフォルテを倒してしまっていたの」

今回のようにね。と付け加える博士。しかしそうなってくるとここで新たな疑問がわき上がってくる

そのことにキザマロがいち早く気づきその疑問を口に出す

「でもそれじゃあ変じゃありませんか？いままで、フォルテは世界に危機が訪れると姿を現したんですよね？じゃあ今回はなんで姿を見せたんですか、今世界はいたって平和ですよ？」

「うーん、それについては私よりも詳しい人がいるからその人に聞いて頂戴」

そついつて博士はドアの方を指差す。すると狙ったかのようにドアが開き、また誰かが入ってくる

そしてその人物とは……………

「まったく、話が長すぎる。いつまでオレをまたせるきだ」

伊集院炎山本人であつた

予想外の人物の登場に博士以外みんな固まってしまい、場が急に静まり返る



## 第八話 明かされる真実 その2

### 第八話 明かされる真実 その2

伊集院炎山本人の登場という予想外の状況に対する戸惑いも何とか収まった頃、ようやく炎山本人が口を開いた

「ようやく落ち着いたか。いいか、これから話すのは嘘でも作り話でもない現実だ。まずそれを頭に入れておけ」

そういつて厳しい視線でスバルたち全員を見渡す炎山

この突然の状況とあまりに高圧的なものの言い方に何人かが反論しそうになるが、全員相手の雰囲気飲まれて思わず首を縦に振ってしまった

「よし、まず始めにこのフォルテ・・・こいつが何者なのかだが」

いきなり話の確信に迫るようなことを言われみんなが固ずを呑む

しかし炎山はそんな空気をまるで気にすることなくあくまで淡々と話を続ける

「こいつは、200年前のネットナビと言われる電波体の前身となったプログラムがそのまま進化したものだ」

「『『『二百年前!!??』』』」

とても信じられないようなことを言われ皆、一様に疑問の声を上げる  
ただ唯一この話に驚いていないヨイリー博士もスバルたちがそのこ  
とをすぐに信じられないことに納得しているようで、うんうんと首  
を縦に振っている

「まあ、これは別に信じなくてもかまわない。お前達が信じようが  
信じまいが、奴は事実として存在する。そうだろう?」

そういつて真っ直ぐにスバルを見つめる炎山。その強い意思の宿つ  
た目に射抜かれなにもかも見透かされたような気分になる

「さて、本題にはいろいろ。何故奴が姿を見せているのかだが……  
・それは封印が弱まっているからだ」

「封印?」

スバルのその疑問に炎山が頷きその疑問に答えるように話を続ける  
「そうだ。さつきも言ったとおり、フォルテは200年前に生み出  
された存在だ。当時、奴はそのあまりの強さ故にどうしても倒しき  
ることが出来ず、結局弱ったところを強力なプログラムで封印する  
しか手がなかった」

そういつて悔しそうでもありどこかすまなそうな表情をする炎山

「じゃあ、封印が弱まっているっていうのは」

「どんなに強力なプログラムでも所詮は人間の作ったもの、いつかは壊れる」

スバルの問いに頷きながらはなしを続ける炎山

「この2000年、世界レベルの危機などに際して封印が一時的に弱まり奴が現れることは多々あった。FM星人、ムー大陸の例などがそうだ。だが……メテオGの一件はこれまでとはわけが違った」

この場で炎山以外で言葉を放つ者はいなかった。ただでさえ重たい雰囲気があることばでより重たくなっていく

「ノイズの持つエネルギーは余程フォルテと相性がよいらしくてな。ディーラーとの戦いで急激に増えたノイズを奴は吸収してついには封印そのものを破り始めている。このままでは封印が破壊され奴が完全に復活するのも時間の問題だ。そうなれば現状、奴を倒す手段はなく……世界は終わりだ」

……

あまりの話の大きさに言葉を失ってしまい場に沈黙が訪れる。そしてほぼ全員が暗い表情をする

しかし、その中で唯一くらい表情などせず逆に闘志を燃やしている存在があった

「で、要するに世界が滅んじまう前に俺達にそいつを倒してまた世界を救えって言うのか？」

爪を勢いよく振り回し、一体どこからわいてくるのだろうかと疑問に思うほど自信に見たい声でそうウォーロック

その自信に満ちた態度につられるように周囲のみんなも明るくなる

「そ、そうよ！ロックマン様なら……………」

「僕らのヒーローならきつと……………」

期待を込めた目でスバルを見つめる委員長とキザマロ

だが、それに対するスバルの表情は厳しい

そしてスバルの内心を言葉にするかのように炎山がくちを開く

「無理だな。完全復活したフォルテは昨日お前達が戦った奴とは比べ物にならない力を持っている。今お前達がフォルテと戦っても勝つ見込みは無い」

「なんだと、てめえ！！」

炎山の言葉に思いつきり反応して今にも彼に襲い掛かりそうになるウォーロック

だがそれはスバルの手によってさえぎられる

「まってロック」

「おい、スバル！あんなこと言われてお前は悔しくないのかよ！」

「悔しいけど、事実だよ。今の僕達じゃ昨日のフォルテにだって敵わない。ロックだって本当は分かってるんだろ？」

「やってみなきゃわからねえだろ！」

そう言っただけだが先程のような覇気がなく、スバルの言っていることが正しいのだとみんな理解する

「スバル君？……」

みんな、スバルの発言にさらに雰囲気は暗くなる。だが、そのときミソラはスバルの表情を見て違和感を覚えた

これまでの戦いの中で彼が挫けそうになったことは何度かあった。しかし今のスバルの表情はその中のどれにも似ていない

むしろ今の彼は新しく現れた強敵に対し瞳の奥で静かに闘志を燃やしているようにさえ見える

「……ん？おい、スバル？」

ウォーロックもミソラ同様スバルの違和感に気づいたようで思いっきり首をかしげる

そしていよいよスバルが顔を上げ初めてスバルの方から炎山に真っ直ぐ視線を向け口を開く

「……でも」

スバルの表情を見た炎山がはじめてこの場で笑顔を見せる

「でも、フォルテを倒すために今のボクにも出来ることはある。だからこそ、あなたはここに来たんですよね？」

そのスバルの一言はここにいる全員に希望を与えるには十分なものであった

## 第九話 容赦無き現実

### 第九話 容赦無き現実

スバルの言葉を聞き満足そうに頷く炎山

「……………三度の戦いを戦い抜いて、ようやく男の目になったな。星河スバル」

希望が見つかったぞ、光……………

誰にも聞こえることなく呟き炎山は話を続ける

「その通りだ。フォルテを倒すため……………お前には試練を受けてもらう」

「試練？」

「なにも過去の人間もフォルテを封印した後、ただ指をくわえていたわけではない。時間をかけ奴に対抗するための強力なプログラムをいくつか作り上げていった。だが、情けないことにどの時代にも優れた技術を悪用しようとする輩はいてな。そんな連中からプログラムを守るためにそれぞれのプログラムには守護者がついている。それを倒すのが……………」

「ボクの受ける試練……ということですね？」

「ああ」

スバルの問いに頷く炎山

「あの……」

ちょうど二人の会話が途切れたところを狙ってミソラが会話に割って入ってくる

「その試練、私も受けられませんか？」

「ミソラちゃん！？なに言ってるの！！」

驚くスバルを無視してミソラは炎山に詰め寄っていく

「無理だ」

だが、炎山はそんなミソラの願いをなんの躊躇いもなく一刀両断する

「私だって戦えます！危ない戦いだって分かってます。でも！だからこそ私は……」

スバルと共に戦いたい。その一心で必死に炎山へと訴えかけるミソラ  
そしてその思いを抱いているのは彼女一人だけではなかった

「お、オレにも戦わせてくれ！！」

そういつてゴン太が部屋のドアから入ってきた

「「「ゴン太（君）！？」「」」」

またもや予想外の来客に驚きの声を上げるスバルたち

「ゴメンな、実は途中から部屋の外で聞いてたんだ」

ゴン太はスバルたちのを向いてそういつた後すぐにまたミソラと並んで炎山と向かい合った

「オレ、もうスバルが、大事な友達が一人で戦ってぼろぼろになるところなんか見たくないんだ！だから……」

「スバル君は私のたった一人のブラザーなんです。もう彼が一人で危険に立ち向かうところを見たくないんです！だから……」

「「一緒に戦わせてください！！」「」」

そういつて二人とも炎山に深々と頭を下げる二人

しかし……

「断る！何度頭を下げようが、何人で頼み込もうが……俺の返事は変わらない」

二人の心からの願いを炎山はどこまでも無慈悲に切り捨てる

そしてそれだけにとどまらず二人に更なる残酷な現実を突きつける

「お前達の実力ではついてきても足手まといにしかならん。星河の邪魔をしたくないのなら今の自分達にできることをしている」

炎山の突きつけてくる現実になすすべも無くへたれこむゴン太

「そんなこと分かってる!!」

それでもなおミソラは炎山の突きつけてきた現実に対し涙を浮かべて抗議してくる

「私なんかじゃスバル君の足手まといにしかないことくらい分かってる!!でも!それでも・・・」

「くだらん、子供の理屈だ」

だが、そんなミソラの心の底からの願いさえ炎山は一蹴した

「っ!?!」

「ミソラちゃん!?!」

「まって!スバル君!?!」

とうとう反論する術をなくし泣きながら部屋を飛び出していくミソラ。そして委員長の制止の声も振り切ってベッドから飛び出してミソラを追いかけていくスバル

それに続くようにゴン太もふらふらと立ち上がり部屋を出て行く

「ゴン太君!」

「ああ、もうあなたまで！」

今のゴン太の状況が心配なのかキザマロと委員長もゴン太の両脇を固めるようにしてついていく

ハーブは駆け出していったミソラに最初からついていっているのだから、ここでここにいるのは、炎山、ヨイリー博士、ウォーロックの三人になってしまった

そしてウォーロックがいきなり炎山に詰め寄っていく

「確かに、てめえのいってることは正しいかもしれない。だがな！いくらなんでも言い方ってもんがあるだろうが！」

炎山の台詞に完全にキレたようでウォーロックが彼の胸倉を掴みあげる

「よしなさい、ウォーロックちゃん！」

さすがにまずいと判断したヨイリー博士がウォーロックを止めにかかる

だが、完全に頭に血が上っているウォーロックにはまったく聞こえていない

「……………ならば貴様ならどう説得したというのだ？」

しかし炎山はウォーロックに乱暴をされてもまったく動じることな

く冷徹な態度を崩さない。一点の曇りも無いどこまでも澄み切った目でウォーロックを睨みつける

「あの二人の覚悟は本物だった。それこそ本当に命を賭けられるほどにな」

「くっ!？」

「本物の覚悟と誠意を持っていたからこそ俺は真実で答えた。それ以外にあいつらを説得する答えが無かったからだ。お前にはあったのか？あれ以外にあいつらを納得させられるような答えが」

炎山のどこまでも真っ直ぐな問いに答えることが出来ずに腕を大きく振り上げそれを彼に向かって振り下ろすウォーロック

「く!.....くそおお!!!!」

「ウォーロックちゃん!!」

しかしその振り下ろされた爪は炎山には向かずに彼の隣でむなしく空を切るだけだった

いまだに彼の胸倉を掴んでいたもう片方の手もはずしてだらりと腕をたらしめている

「分かってる、分かってんだよ・・・ホントはなあ・・・あいつらの事を考えたら、本当は俺かスバルがそのことを言わなきゃならねえって事ぐらい・・・でも、でもよお!!」

そこまで言いかけてふと我に帰るウォーロック

そして炎山に小声で「悪かったな……」とだけ呟き彼も部屋を出て行こうとする

しかし炎山はそんな彼を引き止めた

「分かるぞ、ウォーロック。お前のその悔しさ」

「は！てめえなんぞになにが……」

「守りたいものを守ることでできない悔しさ。大事なものを傷つけることしか出来ない辛さ……そして大事なものを危険にさらさねばならない怒り。俺には良く分かる……」

「お前……」

その時になって初めてウォーロックは気がついた。彼の炎山の握られている拳が血の気がまったく無いほどに強く握り締められているのを

きつと彼も自分と同じでみんなのことを大事に思っているのだろう。それでもなおあの二人のために心を鬼にして先程の判断をしたのだろう。それこそ己の身を斬る思いで

（かなわねえな……まったく……）

ウォーロックはこのとき初めて心から敗北を認めた

これまでどんな奴に出会っても負ける気がしなかったというのに、この伊集院炎山という男にだけは勝てる気がしなかった

そしてそれもいいかと思ってしまうている自分がいることに気がついた

「へっ！俺はスバルたちの様子でも見てくるぜ」

「ああ。星河にあつたら伝えてくれ、今日は休んでいると。そして明日、WAXAニホン支部にこい・・・とな」

「あいよ、じゃあな・・・旦那・・・」

そういつてウォーロックは部屋を後にした

## 第十話 秘めた恋心

### 第十話 秘めた恋心

「まさかウォーロックがあれほど成長しているとわな……」

ウォーロックが部屋を出て行った後に炎山が嬉しそうに言う

「そうね……ちゃんと人を思いやれるいい子になってるわね……」

ポットのお湯を使って作ったお茶をすすりながらヨイリー博士も満足そうに頷く

「ああ。だからこそ申し訳ない気持ちで一杯だな。こんなことに巻き込んでしまって……」

炎山は今このときほど自分の力の無さを恨めしく思ったことはなかった。自分一人でフォルテと戦える力があればこんなことにはならなかったはずだ

しかし炎山の思いを汲み取ったヨイリー博士はその考えを否定する

「それは違うわよ、炎山ちゃん。あなたが……いいえ、あなた達がいてくれたから私達は希望を失わずにいられるのよ？」

自分の正体をしっている博士のその言葉に感謝の念をいただく炎山  
しかし口から出てきたのは

「……「炎山ちゃん」はよせ。それより明日の準備があるさ  
つさと引き上げるぞ」

そんな不器用な照れ隠しの言葉であった

時間は少し遡り場所も変わって病院の屋上、そこではミソラが一人  
悔しさに打ちひしがれて泣いていた

「ひっぐ……うっ……うっ……」

覆しよの無い現実を目の前にどうすることも出来ずに座り込んで  
しまっ

「ミソラちゃん!」

そしてそのミソラを追ってきてスバルもすぐに屋上に到着する

すぐにでもミソラのそばに駆けつけようとするが、それはミソラの  
制止によってとめられる

「ぐす……来ないで……」

「ミソラちゃん……」

「こんな……ぐす、みつともない顔、スバル君に見られたくないよ……」

「じゃあこれならいいでしょ？」

そういつてスバルはゆつくりとミソラに近づいていき、彼女とは正反対の方を向いて座り自分の背中を彼女の背中に預けてそつと手を彼女の手に重ねる

「……ありがとう……スバル君……」

しばらくしてからようやく落ち着いたのかミソラが泣きなんだ

「ダメだな」私って……」

「そんなことないよ。ミソラちゃんが……みんながいるからいたから僕はこれまで頑張ってたんだよ？」

ミソラの手を握る力を強めてそういうスバル。それはお世辞でも慰めでもなくスバルの本心だった

しかしスバルのその答えに対してミソラは首を横に振って間違いを訂正する

「ううん……そういうことじゃないんだ、スバル君。なんていえばいいのかな……私が良い子になれないからダメって意味だよ……」

「?・・・ミソラちゃんは良い子だよ?」

スバルはますます訳が分からなくなってくる。どう考えてもミソラは良い子だろうに

自分の言っていることとスバルの言っている事の食い違いを感じてほんの僅かだけ微笑むミソラ

「スバル君にとってはそうかもね。でも、他の人から見たら違うんじゃないかな・・・」

「どうということ?」

私はスバル君が好きだから・・・きっと他の何よりもスバル君を優先しちゃうから

そう言いそうになるのを必死で耐える。いくらなんでもこれではフェアではないだろう

(まったく、そう思えるだけで十分すぎるくらい良い子だって言うのにねえ・・・)

ミソラの気持ちを一番理解しているハープがハンターV.Gのなかからため息をつく

「うつん、やっぱりなんでもない」

そういつて元気に立ち上がり思いつきり背伸びをするミソラ。もちろん、スバルに心配をかけさせないための演技だ

ちょうどその時、入り口からウォーロックが入ってきた

「お、いたいた」

「ロック？一体何してたの？」

そう問いかけるスバルに対しウォーロックは珍しく曖昧な態度をします

「あゝなんだ、病室でちょっと・・・な」

その言葉を聞いてスバルがいきなり慌てだす

「ちょっとロックもしかして怒って大暴れとかしたんじゃない？！」

「お前は俺をなんだと思ってるんだよ！！」

あながち外れということでもないがいきなりそんなことを言われたらさすがに腹が立った

「あゝとにかく、炎山の旦那から伝言だ。今日はもう休んで、明日WAXA二ホン支部にこいとよ」

「明日？なんで今じゃないんだろ」

「さあな。なにか準備でもあるんだろ。今日は俺も疲れちまったからちょっと休むぜ」

それだけ言ったらウォーロックはさっさとハンターV.Gのなかに戻

っていつてしまった。なんだかさっきの彼は妙に覇気が感じられなかった

（それに“旦那”って……一体なにがあっただ……）

いくつかの疑問を残しながらもいまの自分ではそれを解決する手段を見つけることが出来ずに仕方なくミソラと一緒に病室に戻るスバル

そしてそこにはもう、炎山とヨイリー博士の姿は無かった

## 第十一話 切れない絆

### 第十一話 切れない絆

翌日、炎山に言われたとおりWAXA二ホン支部へと向かうために病院をでるスバル

病院を出るときに入院の治療費などのことを聞いてみたがどうやら既に炎山によって支払われているようでお金の心配は要らなかった  
ターミナルに向かう途中にいくつかの気がかりを思い歩幅が小さくなるスバル

「しかし、妙だな。大吾のやつだけじゃなくオフクロまで家にいないなんて……」

ウォーロックがハンターV.Gの中からスバルが気にしていることの一つを口に出す

「うん……どうしたんだろう……」

スバルは退院するときにあかねに電話をかけたのだが一向に出る気配が無く、結局つながることはなかったのだ

スバルの母であるあかねは夫である大悟が行方不明になってからは

女手一つで家庭を守っており、家を無断で空けることなど殆ど無かった

メテオGの事件の後にウォーロックと大悟が無事に生還してからはパートの仕事もやめてより一層家事に専念することになった

あかねの親友であるハートレスと共に旅行に出かける事は何度かあったが、それでもスバルに何もいわずに家を空けることなどは絶対にしなかったはずだ

しかしそのことについてはミソラからある程度情報を貰っている

ミソラによるとあかねはどうしてもはずせない用事が急に出来たそうである場所で今身動きがとれず缶詰状態になってしまっているそうだった

そしてそこでスバルの怪我を知り、自分ではどうしてもスバルを見舞うことが出来ないので代わりにミソラにいつか欲しいとの連絡が入ったそうだった

「母さんも昔は父さんの手伝いをしていたって言うからもしかしたらそれに関係あるかもね」

「ま、オフクロのことだから俺もなにかあったとは思ってないがな・・・」

そこで言葉を濁すウォーロック

スバルも彼がなにを言いたいのか理解して表情を硬くする

「やっぱり、ロックもゴン太のことが気になる？」

「・・・・・・・・・・」

スバルの言葉に何も言い返さないがその沈黙がもはや答えであった

「炎山さん、いくらなんでもあそこまでいわなくても・・・・・・・・・・」

自分達と共に戦いたいと本気で願っていたゴン太を炎山は無慈悲な現実を突きつけて拒否した

ある意味仕方の無かった事なのかもしれないが、スバルにそれを納得しろというのは無理な相談だった

（旦那にとつてもあの決断は苦渋だった。あまっちょろいこいつにはあれを納得させるのは無理だな・・・・・・・・・・）

炎山の厳しさを伴った優しさとスバルの思いやりを持った優しさの両方を知っているウォーロックは何もいうことが出来ずただ考え込んでしまった

「ゴン太の奴、大丈夫かな・・・・・・・・・・」

ゴン太を慰めに行った委員長達の報告では明日になれば大丈夫だと、ニホン支部へ行く件を伝えたときに聞いたがやはりそうとう落ち込んでいたようだ

「こればかりわな・・・・・・・・あいつの根性しだいだ・・・・・・・・」

スバルに下手な希望を持たせるわけにもいかず思ったことをそのま

ま言葉にする

「「……………」」

そのやり取りでさらに足取りが重くなるスバル

しかしそんな嫌な予感はずいぶん前から聞こえてくる声によってかき消されてしまう

「おゝい！スバルくゝん」

「！ミソラちゃん……………」

みるとそこにはミソラだけでなく委員長、キザマロそしてゴン太、みんなの姿が見える。みんなスバルが来るのを心待ちにしていたのだ

「みんな……………」

「へ！どうやら無駄な心配だったようだな……………」

ミソラ達にひきつけられるかのように駆け足になっていくスバル

「もう、遅いよ！スバル君」

「私達を待たせるなんていい度胸ね！」

スバルがつくなりミソラと委員長が文句を言ってくるがその顔は笑っており怒っているようには見えない

「……………ゴメンね……………」

当たり前のように自分の事を待っていてくれたみんなのことを思い  
思わず目頭が熱くなるスバルだったが、それを我慢して笑顔をつくる

「スバル……」

なにか言いたげにスバルに近づいてくるゴン太。それをスバルも真  
っ直ぐに向き合って答える

「その……ゴメンな。昨日はかつこ悪いところ見せちゃって……  
」

「ゴン太……」

「でも、もう大丈夫だ！牛井も腹いっぱい食べて元気百倍だ！！」  
そっいつて自分が元気であることを精一杯アピールするゴン太

しかしその目が真っ赤に充血しているのは誰の目にもあきらかだっ  
た。勿論、この中にそのことを指摘してくるものはいなかったが

「ハハハ！ゴン太らしいや……」

ゴン太の気持ちを汲んで彼の調子にあわせるスバル

「スバル君……」

そして今度はミソラがスバルに向かい合ってきた

「あの人が私達も一緒に呼んだって事はきつと私達にもなにか出来

ることがあるってことだと思うの」

そういつてミソラは自然とスバルの両手に自分の手を重ねる

「私頑張るね。スバル君と一緒に戦えないのは悔しいけど、私に出来ることを精一杯頑張る。それがスバル君の助けになるって信じてるから……」

「ミソラちゃん……」

「わ、私達だっているんだからね！」

「そうですよ！きつとお役に立って見せます！」

最後に委員長とキザマロが二人の間に割り込んできた

「みんな……ありがとう……」

こんなにも自分の事を思ってくれる友がいる。守りたい絆がある。共に過ごしたい未来がある。それを思うだけで体の底から力が漲ってくるような気分だった

そしていよいよWAXA行きのバスがやってくる

「よし、行こう」

## 第十二話 新たなる絆

### 第十二話 新たなる絆

「スバル！」

「か、母さん？」

「オフクロ！？なんでここにいるんだ！」

バスに乗ってWAXAニホン支部にやってきたスバル達を出迎えたのはスバルの母、星河あかねであった

あかねはスバルが降りてくるのを見るや彼を抱きしめて体に異常がないか調べ始める

「ちょ、ちょっと僕は大丈夫だから落ち着いてよ、母さん」

さすがに委員長達の前で親に抱きしめられるのは気恥ずかしいものがあるのか若干顔を赤らめながらスバルがあかねを落ち着かせる

あかねもスバルにとりあえず大怪我がないのを理解してスバルを離す

「ふう……いらっしやい皆、よく来てくれたわね」

よく来てくれた、という割りにあかねの表情は一向にさえない

「あの、母さんもしかして……」

母がここにいる理由とその様子からスバルはある一つの結論に思い至る

そしてあかねもスバルがなにを言いたいのかを察して頷く

「ええ、昨日スバル達が聞いたことは全部知ってるわ」

「あの……母さん……」

あかねが母として自分の身をどれほど案じてくれているのかということは過去三度の戦いで既に身に試みているスバル

そんな母にまた戦いに身を投じなければならぬとどういえないのか悩んでしまう

しかしそんなスバルの葛藤すら理解しているかのようにあかねは優しく微笑む

「大丈夫よ、スバル。止めはしなわ」

（母さんの手、震えてる）

自分の肩に寄せられたあかねの手が僅かだが震えていることに気づくスバル

きつとあかねは自分に余計な負担をかけないように反対したいとい

う心を必死に抑えて応援してくれているのだろう

「さあ、いつまでもここで立ち話するわけにも行かないわね。行きましようか、大吾さんや博士達も待ってるわ」

そういつて先頭を歩き出すあかね。スバルたちもあかねに続いて建物の中に入っていく

そしてあかねに先導され到着したサテラポリス司令室には炎山とヨイリー博士、そしてスバルの父、大吾とハートレスが待っていた

「お！来たなスバル」

「待っていたわよ」

「いらつしゃい、みんな」

「・・・早く来い」

しかしスバルたちを待っていたのはそれだけではなく・・・

「ツカサ君！？」

「やあ、スバル君。久しぶりだね」

「それにあなたは・・・オリヒメ！！」

「ハーブ・ノート、息災にしておったか？」

「ジャック君、クインティア先生も！？」

「よ、久しぶりだなお前ら」

「みんな元気にしていた？」

かつてF M星人のジェミニと悪の人格であるヒカルと共にスバルと戦ったが敗れ、自分の悪の人格を封印するため旅に出たツカサ

恋人を失った悲しさと人間の愚かしさから世界を統べる神が必要と考えムー大陸を復活させ世界を支配しようと目論んだオリヒメ

戦争によって両親を失い世界そのものを憎悪しメテオGを地球にぶつけて今一度歴史をやり直そうとしたクインティアとジャックの姉弟

皆かつての戦いでスバルと戦った者達で今は皆改心して自分の犯してしまった罪の贖罪をしているはずだった

「みんなどうして……」

ここにいるのか。その疑問には炎山が至極簡単に答えた

「全員、今回の戦いにおいて必要な戦力だからだ」

そう炎山が答えると同時に集められた四人がスバルを見て頷いた

そしてその目は皆、こういつていた“共に戦おう”と

「ハハ、ハハハ……」

なぜか口からはそんな笑い声が出ていってしまうスバル

先程、委員長達と合流したときはどんどん力が沸いてきてフォルテとだって戦える気がしてきたというのに

それが今はどうであろう、もはや相手が誰であつても負ける気がしなかった

「さて、無駄話をしている時間はない。話を進めるぞ」

そういつて炎山が司令室のモニターの前にたちみんなの注目を集める

「僕が受けなければならない試練のことですね？」

「どうんな試練だろうとさつさと片付けてやるぜ！」

これからの作戦にたいして意気込みを見せるスバルとウォーロック

しかし炎山の答えは違っていた

「いや、その話はまだだ。今回のミッションはフォルテ討伐チームの最後の一人の救出だ」

「最後の一人？」

「そう。あと一人、どうしてもチームに必要な者がいる。そいつを救出するのが今回のミッションだ」

そういつて炎山がチームの最後の一人の名を口にする

「その男の名は………」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1264i/>

---

流星のロックマン 過去からの遺産

2010年10月8日11時44分発行